

大西良慶・ゆっくりしいや～百年の人生を語る【再読版】

令和5年2月5日（日曜日）五穀祭

こうとくにんげん塾 #318

百年

この百年、人は様々に論評する。これほど世が変動を遂げた時代はないからねえ。けれども、どうやろうね。筆をもつ人たちにしても、**局部局部の善悪はいえても、全体把握ができていますかどうか。**

敗戦の後に日本の国民がどういう気持で生きてきたのかね。政治が変わり、人々の生き方が変わり、国そのものが変わってしまった。アメリカの指導が大きな力になっている。基礎は自由主義やね。日本は本当に自由主義の真髓を身につけることができたのか。それまではお上の国やった。お天子さん（天皇）の国で二千五百年の歴史。聖徳太子の憲法（十七条）以来、お天子さんのもとに国民は統一されてきた。

それが敗戦の結果、自由主義という恩恵にあずかって囲いから解放された。確かに自由はいい。今迄口に出して言えなかったことも言える。言論は自由やから。思うことを言うと引っ張られる特高警察がついてまわる時代と大違い。それまで文句を言う者は生きられなかった時代に比べると、裸になったような喜びはあったわね。確かに自由はいい。信仰は自由やから、してもいいし、せんでもいい。礼儀も自由。

その代わり、従来の親切とか奉仕の心とか辛抱を教える教育がなくなってしまった。**先生は先生の自由があり、生徒は生徒の自由があり、親は親の自由があり、子は子の自由があって、みんなちぐはぐになる**。家も教育もちぐはぐ。これでは日本が良かったのか悪くなったのか、どっちともいえない。人の心は風の吹くようなもので、その時その時の空気が変わってくる。人間が変わる。日本が機嫌悪くなる前「枯れすすき」という歌が流行った。その調子といい、捨てばちな文句といい、これで日本の将来はどうなるのか^{おぼつか}覚束なかった。国民の気持が流れていたのやね。

案の定、戦争に負けた。ところが、軍備を廃止したおかげで、軍事に使う何百億か何千億というお金が実業、国土経営の方へ回ってきた。会社ができ、人材が集まり、今では東洋一の発達を遂げたという。何がいいか悪いか、わからんものやね。そういう日本再建の途上でみんなが歌った、九州の炭坑節。「さぞやお月さん煙たかろ、

ヨイヨイ」という。その心持ちがニクいではないか。お月さんも煙たかろ、とお月さんにまで気を配ってお月さんの気持になっている。日本を建て直すためと言いながら、お月さんには煙たい思いをさせて、済まないという思いにあふれている。

ところが、しばらくすると様子が変わってきた。「私は立つ鳥、波に聞け」というて踊りよるの。人のことなんか構うておれるかという気になる。お月さん煙たかろと、えらい違いやの。個人主義の表れやね。自由主義は利己主義になる。自分の利益が中心になるの。自分の利益が中心になって思うように事が運ばなかったら人を憎む。日本の国が一つになって国のために尽くすという空気がなくなる。

学校の教育でも「義勇奉公」は死語になっている。私ら明治の人間には、教育勅語が身にしみついている。忠孝の道を教え、博愛衆におよぼし、という心持ちでやってきた。その気持は今の教育と肌身が合わない。教育勅語と言うたら嫌いよる。

これは新聞に載っていた話。貧乏な家があった。付き合いも何もない。隣も知らん顔してる。知らん顔しているから、長いこと戸が開かないことにも気がつかない。ある時、田舎の爺さんがその家の友達を訪ねて来た。なんでも、夢に見たという。夢で友人が「早く来てくれ」と訴えたという。戸が開かないので、こじ開けて入ったら、死んでいた。それも、体が溶けてしもうて、骨になっていたという。

隣人の言うことには「転居したと思うてますねん」これですまないの。覗きに行かないどころか、気にもかけなかったことを、それこそ気にもかけてない。世の中がこういう気風になってきたのは、一面、宗教の自由ということの行きすぎやと思う。宗教は自由や、勝手にせえというわけで、誰も宗教を尊重せよとは言わない。宗教は目に見えない神様を説き、仏様を説くの。神や仏を信じると、人をあざむくことができなくなる。人には見つけられんことでも、神様や仏様は見とおしや。

神様が見てござる、仏様が見てござる。悪いことをしようと思うても、見てござるで、歪んだ心が押えられる。少なくとも、利己主義が思いのままにのさばることはない。自分の心のなかに神様や仏様を持つことは、大事なことやと思う。

そうそう、この百年の話やったね。私は百年生きてきたけれども、百年の是非を論じることはできない。それは、後世の歴史が決めてくれることやね。ただね、これ

だけは言えるの。手っ取り早くいうと、私がこの清水寺から眺めてきた景色やね。その景色が変わったかどうか。それだけは、実際にこの目で確かめてきた。世の中が変わった、様子が変わったという。けれども、この山の上から京都市中を見おろしている景色としての全体印象をまとめてみると、あんまり変わってないのね。

その景色の確かなことは、**信心の家は長いこと家が長く、信心のない家は上がった**
り下がったりの差が大きくて、しかも短い。信心でも、胸に一物を抱いて、祈りに
参ったはる人は、良い悪いが早う出てくる。**このごろ顔見せんな、参ってこんな、**
という調子で上がり下がりが激しい。何か思惑があって参る人は心が激しいためか、
動きも激しい。清水寺の観音さんはね、お祖父さんが参らはって、次の代が参って、
その次の代も参るといのように、長く続いている。宗旨のいかに関わらず五十年
も六十年も続いている。細う長うやね。寒中、滝に打たれたり、朝参りしたりする
のも殊勝なことやが、**長続きしなければ何にもならない。**

私がお寺に入ってから六十余年になる。婦人会も六十年、法話も六十年。その時初
めて店出した人もお祖父さんになって、孫の代になっている。**静かな、本当の信心**
した人は上がり下がりがなくて、長くいったはる。**えらい儲けもなけりゃえらい損**
もなく、おかげさんで三代、四代、無事に同じ商売をやってますというのが、うち
の信者の中心やの。長う参らはった人ほど、じっくりと、信心をよろこんだはる。
だ一と参って、華やかにして、ちょっとした間に出てこんようになった、一向に顔
見せんな、どこへ行かはったんかいな、という人もいるにはいるが、**長続きしない。**

信心というのは、平常心これ道なり、でね。心静かに、大きなことを思わんと足元
を見て、^{けが}怪我あやまりのないように進むことやね。京都が千年、栄えてきた秘密も
そこにある。山を望まず海を望まず、京都は京都らしく、静かなきれいな心で維持
されてきた。そういう気持が市民にあって、先祖代々の家、商いが長く続く。お寺
でも同じなの。**計画をどんどん進めるようなお寺は、表面、威勢はいいけれども、**
実は盛衰が多いの。清水寺は、千何年になる。千年も、昔どおりにくすぶっている。
くすぶっているのは長持ちする。法隆寺もそうなの。

宗教からいうとね、荒いことをすると怪我也荒く出てくるという、ごく当たり前の
ことを教える。動揺のあるのは人間の望みかも知れないけれども、**信心の良さは、**

ここで一番という、その動揺を抑えるところに信心の良さがあるの。目先のことよりも百年、千年のいのちが見えてくるのね。体がそうやね。えらい思いをして高望みするよりも、無茶さえしなかったら怪我しない。危ないことをしようとするから怪我をする。それが信心の生き方であり、京都千年の伝統やね。

そうやから、清水寺の信者には自ら信心を語るほどの人はいない。信心をひけらかすような人はいない。大体静かやね。若い人でもお年寄りでも、何年も続けてはる人でも、特に信仰して、信仰のおかげでこうなったというような人は、居はらへん。また、そんな人は私のところへは顔見せへんわね。静かに出て来て、お茶でも飲んで、静かに帰ってゆく。普通やね、平凡やね。

私の望みというのは、とったかみたかという危ない生き方よりも、家が長く続き、家族が長く続いて、仲良く暮らしてもらいたい。観音さんの注文はそれやね。太閤さんみたいに偉いことをしても、次の代に家が滅んだりしたら、喜んでいいのやら、悲しんでいいのやら分からない。人間、あまり偉くならんでもええやないか。

出典『ゆっくりしいや～百年の人生を語る』（大西良慶・著、PHP 文庫）

おおにしりょうけい

大西良慶：明治8年、奈良生まれ。明治30年、興福寺住職。大正3年、清水寺に晋山。ほっそうしゅう北法相宗管長、清水寺貫主。日本宗教者平和協議会会長など仏教界の要職を歴任。昭和58年、逝去（107歳）。

今 後 の 予 定

五 穀 祭	3月 5日（日曜日）	午後0時15分
五 穀 祭	4月 2日（日曜日）	午後0時15分

鎌ヶ谷市コミュニティバス「ききょう号・東線」をご利用ください。

【行き】新鎌ヶ谷駅 午前11時47分発、東初富公民館 午前11時59分着

【帰り】東初富公民館 午後1時26分発、新鎌ヶ谷駅 午後1時37分着

★鴻徳神社・五穀さま通信（月2回配信・無料）★

最新の行事予定などをお知らせします。ホームページより登録して下さい。

<https://kotoku-jinja.jp/mm>